

上演5 岩手県代表
岩手女子高等学校
作 岩手女子高演劇部
「ミッション」

講評文 秋田県立横手高等学校 石河かずは

この劇は、高校生の等身大の視点から男女別学の存在意義を問うものであった。

幕が上がり、舞台上では緊張した表情の男女とそれを見守る友人たちの姿。どうやら男子生徒が女子生徒に告白しようとしているようで、これが王道の恋愛劇であろうことは誰が見ても察することができる。彼らの、タイムリーな話題やネットでの流行を取り入れた軽快な会話によって、観客は物語に引き込まれていく。

そして、中性的な名前が目立つこの四人が繰り広げていた恋愛模様は劇中劇であり、全く予想していない展開だった。加えて登場人物たちは全員が女性で、物語は彼女らの通う女子校の共学化について話題を移していく。

“女性だけの空間で生きたい”と主張する二人は残る二人から時代について説かれ、共学化を強く訴えられる。しかし、彼女らにもまた男性を拒む明確な理由があった。男性と女性にはどうしても身体的に違いがあり、そして男性に対し無意識に警戒心を抱いてしまう女性も存在する。確かに、もしもエレベーターで男性と二人きりになったら、もしも街中で突然声をかけられたら、きっと恐怖を抱く女性が多いはずだと思う。しかし、その感情まで差別と呼んで強制するのは、もはや配慮や多様化とは言えないと感じた。そういう多様化の流れに隠された危うさを体現する台詞や演技によって、私たちも日常において感じてしまう反射的な偏見に気付かされた。そして、誰にでも選択肢が開かれていることこそ本当の多様性や平等だということに改めて気付かされた。

平等や多様性といった言葉の本当の意味を問う中で、観客を巻き込むような表現や一見すると単なる笑いどころだった舞台の外を意識する会話によって、観客である私たちも彼女らの主張や抱える感情などを真っ直ぐに受け取ることができた。そして、その切実な思いに強く心を揺さぶられた。

薄くした暗転の中で動きを見せたり、多くの人が一度は目にしたことのあるネタを取り上げてみたりするなど、観客が飽きることなく舞台をめいっぱい楽しむことができるような演出が散りばめられていた。そのような観客の視線を舞台上に釘付けにする数々の工夫があったからこそ、終盤の展開への衝撃と感慨が生まれたのだろうと感じる。

「ミッション」は、受け入れることと拒むことの複雑な境界線に切り込んだ、あらゆる人々に多様な選択肢と開かれた価値観を持つよう訴えかける作品だった。